

自立的政治闘争団体と政党政治（Ⅲ）

—— ドイツ国家党をめぐる ——

岩 崎 好 成

Independent Political Combat Leagues and Party
Politics in the Weimar Republic (Ⅲ)

Takashige IWASAKI

(Received September 5, 1994)

4 騎士団と民主党

(1) ドイツ国家党の成立

1930年7月28日、青年ドイツ騎士団団長マーラウンは、ドイツ民主党党首コッホ・ヴェーザー等とともに、新党ドイツ国家党の結成を公にした。結成アピールは次のように言う。¹⁾

「数年来、何百万の人々が政治生活に吐き気を催し、何も期待せず、そこから遠ざかっている。更に、諸政党に属する何百万の人々も、自らの活動が偉大な政治的諸目的に役立つという見込みを持ってないでいる。とりわけ、建設心ある若い世代が政治から疎外されている。彼らは失望し反発して脇に退くか、ネガティブなラディカリズムの誘惑の犠牲となっている。……この窮境における利害集団の荒稼ぎを断じて許さず、ドイツ人を真の国民Staatsvolkとして統一せんと欲する人々の共同体が、古臭い政治手法や無意味な制限から自由に、黑白赤と黒赤金との煽動的対立を乗り越えて、形成されねばならない。この共同体の政治姿勢・国民主義的意志を指し示す名称こそ、ドイツ国家党である。」

これまで述べてきたように、騎士団は29年初頭より、反金権主義・反ラディカリズムを標榜する国民主義的結集運動VN-Aktion(真正国民行動)を唱導し、翌30年4月、これを公式に政党機能をもつVNR(真正国民全国連合)として組織化した。その際、このVNRを事実上付属政党化した騎士団の運動のあり方は、当時要請されていた政治運動の組織的形態、すなわち政党と政治闘争団体の提携に合致し、かつ一歩踏み込んだ形の統合運動体的あり方であり、ナチ党とSAを擁するナチズム運動のそれに相当するものであった。政党・政治闘争団体両ファクターを併せもつこの騎士団/VNRが、生成後二ヵ月半でザクセン邦選挙を戦い、更に一息つく間もなく、その一ヵ月後の7月末に、既成政党である民主党と合併して国家党を結成するというわけである。

この急速な展開の要因が奈辺にあったかは、ナチ党が一躍第二党に進出(議席数12→107、得票率2.6→18.3%)し国家党が惨敗(25→20議席、4.9→3.8%)することになる9月14日の国会選挙が、合併わずか一ヵ月半後に控えていた点に着目すれば、容易に推測しえよう。実際、8月16日付けのVNR・騎士団廻状は次のように言っていた。²⁾

「VNRは国会の解散(7月16日)によって困難な状況に直面した。単独で選挙戦に入らなければ、VNRは小政党として政党リストの殆ど末尾に置かれるであろう。VNRは自らに大きな機関紙をもたず、選挙戦勝利は、強力な一部の地域を除けば、きわめて疑わしいも

のであろう。」

初めての選挙戦をザクセンという邦レベルで、しかも芳しくない成績で戦ったばかりの騎士団にとって、続けて全国レベルの選挙に挑むには余りにも準備不足であった。合併相手の民主党の7月30日の党委員会においては、合併に伴う混乱を批判されたコッホ・ヴェーザーが、「私は混乱を引き起こしたのではなく、困難な選挙戦に直面している党を見込みのあるそれに向かわしめる可能性を創出したのだ」と述べている。³⁾ 同党もまた、すでにザクセン邦選挙でも示されていたような、自らの後退及びナチ党・経済党の台頭を含む右翼・中道陣営の多党分立下では、国会選挙単独行に前途はなかった。それを踏まえての人民党等との政党間提携交渉もなかなか進捗を見ないでいたのである。

またこの合併劇は、確かにVN-Aktionの開始前後からすでに一定の接触が両者にあったとはいえ、十分な全体的議論を尽くしたものではなく、特定の幹部層を中心にいわば上から強引に進められたものであった。上掲のVNR・騎士団廻状には、「国家党設立は、確かに諸君の一部にとっては突然のことであった」とある。⁴⁾ あるいは上掲民主党委員会においては、「我々カッセルの社会共和主義サークルは新党設立の知らせを全く突然に受け取った」との発言、⁵⁾ 9月27日の幹部会においては、「コッホ・ヴェーザーが新党を不意討ち的な形で設立したと非難することは出来ない。通常のやり方では先に進まなかったであろう」との発言がみられるのである。⁶⁾

スタートがそうであっただけに、この合併劇の終息もまた短兵急と表しうるかも知れない。国家党は、そのあり方について詰めるべきを詰めずに直ぐさま選挙戦に突入したが、その間蓄積された相互不信やあつれきを解消するに足る議席数獲得に完全に失敗し、選挙後は、もはや建設的議論は望めず相互非難の応酬となったのである。10月3日、マーラウンは、「我々は自らを独立した縦隊とみなし、国家党との関係は全くその活動・進展次第にする。……我々の(6人)の議員は国会内で青年ドイツ＝真正国民会派を形成する」と指令を出し、⁷⁾ 10月7日以降、国家党フラクションは解体しVNRは国家党から離脱するに至った。したがって、この合併は、正確には、国家党の名の下に両勢力が一部人民党系政治家等を含めつつ結集し、統一候補者リストを作成して国政選挙を一度共に戦った、にとどまるものであった。

しかし、本稿の立場からすれば、わずか二ヵ月余りで破綻するとはいえ、この合併劇はVNRの生成に示された政治闘争団体と政党との提携の必要性、それも両ファクターを併せもつ統合運動体形成の必要性を引き続き物語る事態として見過ごすことの出来ないものである。とりわけ民主党が、VNRを介してとはいえ、事実上政治闘争団体との結合に踏み切った点が重要であろう。民主党は騎士団に何を見ていたのであろうか。逆に騎士団側は、この既成政党との合併をどのように捉えていたのであろうか。本章では、この点に絞って両者の合併論議を検討してみたい。

そしてもう一点本稿の観点上注目すべきは、この国家党が、同じような組織形態を有するナチズム運動を主たる打倒対象として形成されたことである。コッホ・ヴェーザーは、「我々の選挙スローガンは何であるべきか。反ナチズムである」と言い、⁸⁾ マーラウンは、「我々は、国家党を、ラディカリズムから撤退した旧ナチ支持層のための収容陣地となすことを欲した」と言う。⁹⁾ ザクセン邦選挙における騎士団/VNR同様、国家党(騎士団/民主党)は30年の国会選挙でラディカリズムの当否をめぐるナチズム運動に挑戦し、しかし敗れ組織的にも破綻するのである。これは何を意味し、また、二つの運動体はどのように対比されるのであろうか。運動の風貌という次元を中心とした一定の比較検討も、本稿の課題として後に取りあげてみたい。

さて、最後に、国家党のプログラムについて簡単に触れておこならば、8月22日に出された

「ドイツ国家党宣言」等にみられる主張・公約の基本的内容は、先にまとめた VNR のそれと比較した場合、殆ど変わるところがないと言っていいだろう。

たとえば、VNR の経済プログラムが国民主義的な労働組合運動のそれを前面化していたのと同様、国家党の社会経済的要求も、「カルテルやトラストの圧制」は認めないが、また「いかなる社会主義的実験も拒絶する」というものであり、あるいは、「社会的保護制度は全力で護る」が、しかし「全国民の社会的良心」に反するような「その乱用からも護る」というものであった。また VNR 同様、国家党も「民族共同体的基盤の上に立」ち、「特定の宗教的経済的身分の階級的な性格をもつ集団との結合を一切拒否」したから、その社会経済的要求は個別具体性を欠き、総花的理念的言及にとどまるものであった。¹⁰⁾ 旧民主党のプログラムとの比較については先行研究にゆずることとし、¹¹⁾ ここでは、プファルツ選挙区で配られたピラの公約部分を紹介しておこう。それは次のような内容である。¹²⁾

「国家党は国民自治を支持する。国家党は、信条・身分の区別なきあらゆる市民の民族共同体樹立にむけて尽力する。反国民的な独裁は拒絶する。国家ならびに公的機関の浄化を要求する。国家党は政治・経済的困難の一掃をめざして以下の諸改革を擁護する。財政改革——公的支出の計画的削減・制限によるドイツ国民の経済力回復。社会政策——社会立法上の欠陥の一掃。社会政策基盤の維持安定。選挙改革——選挙人と被選挙人との信頼関係。代議員の替わりに指導者を。ライヒ改革——シンプルで儉約型の行政機構。非中央集権的統一国家。対外政策——健全なる国民意識、すなわち戦争犯罪のウソへの闘争、ヴェルサイユ条約修正、賠償負荷の縮小、に力点を置いた上での協調政策。」

選挙改革、ライヒ改革について「宣言」3・4・5項を利用して補足しておくならば、前者は VNR のそれと同様、単純小選挙区制を主張するもので、「人物の価値を高めるために選挙区を縮小」し、「全国リストを廃止」するよう求めている。後者に関しては、第5項では、官僚制を「全国家行政の背骨」と高く位置づけ、官吏の採用・昇進にあたっては業績以外の「党派的観点を基準としない」よう要求している。また、ピラの「非中央集権的統一国家」という表現は正確ではない。「宣言」第4項では、史的条件を踏まえたラント区分改変の上での「強力なライヒ権力の創造」を謳い、各ラントに十分な自治を認めた後にラントの（国家）主権を廃するよう主張しているのである。ちなみに、「プロイセン政府と中央政府の二元性は、両政府の緊密な結合 *Verbindung* によって一掃されねばならない」との一文もそこに見い出すことができる。

（2）騎士団の姿勢

等しく反ラディカリズムの立場に立つ政治運動であったとはいえ、また共に国会選挙単独行の不利を自覚していたとはいえ、全く異質の、それなりに確立した独自の歴史をもつ政治闘争団体と政党が合併に踏み切ったのは何故であろうか。両指導者マーラウンとコッホ・ヴェーザーの思想がかなりの親近性を帯びていたことはすでに明らかにした通りだが、それにしてもなぜ騎士団と民主党の合併か。本稿がこだわるのは、国家党が政治闘争団体と政党との結合体であった点である。騎士団と民主党という組織形態・運動形態の違いをのりこえた組み合わせは何を意味するのであろうか。

まずは、騎士団側の合併にたいする姿勢を検討してみることにする。おそらく騎士団においては、合併に踏み出すこと自体への決断は比較的容易であったかと思われる。その権威主義的組織構造によりマーラウンの決断次第という面も色濃いですが、そこでは、すでに類似する経験が VNR 生成時に果たされていたのであった。

VNR は実質的に騎士団の付属政党であり、しかもその母体となった VN-Aktion は結集運動

化をそもそも目指すものであった。したがって、民主党側の思惑と一致するかとの問題は残るにしても、騎士団の場合、この合併を、VN-Aktionに民主党も合流し結果としてVNRが拡張された、とみなすことが可能であった。7月26日のVNR幹部会の議事録においても、「議長から提案されたこの合併はVNRの尽力続行に最良の方法である、ということが基本的に承認された」とある。¹⁵⁾ 但し、そこでは、もともとVN-Aktionは国家人民党や人民党内の反金権主義的ナショナリストの糾合を先ず期待するものであったから、民主党との合併によって傾いたバランスを補うために、「フロントの右への拡張が不可欠」とされている。同様に、騎士団/VNR側は国家党への民主党員の完全吸収を必ずしも欲しておらず、マーラウンは、「入党化がVNRにとって好ましくない者たちの貯水池として民主党が存続することが望ましい」としている。したがって、VNRも「それとして存続し、解散の可能性は、国家党がVN運動の期待を充足するに足ると証明された時初めて問題になる」のであった。旧党の解体を先送りしているところにすでに、この合併のあいまいさの一端が示されているが、ともあれ、ここでは、VN運動ないしVN-Aktionの一環として新党結成が捉えられている様が見てとれよう。

8月16日付けの騎士団・VNR廻状は、より率直で一部楽観的な民主党観・新党観を語っている。たとえば前者については、「民主党は途方にくれている」のであり、「我々は政党フロントの最も弱い部分に侵入しなければならない」、とまで言う。¹⁶⁾ また、民主党の合併推進派を、「議会主義上で名を成してきた人々の下においても……内心では強く新しきものを切望してきた数多くの人々がいる」、と的確に評していた。¹⁵⁾ 後者については、以下に示すように、VNRは、民主党との合併によって中央党を凌駕する勢力拡大を図り、そこで主導権を確保することでドイツ政治のキャストリング・ボードを握る位置に到達せん、と構想している。廻状は言う。¹⁶⁾

「ドイツ政治のキー・ポジションをすべてVNR議員で占めることは不可能である。ピスマルクは、政治は妥協に存し且つ願望ならぬ可能性の芸術だとした。我々に可能なことは唯ひとつ……キー・ポジションを占める政治集団の中にVNR議員をできるだけ強力に固定することである。我々の課題は、VNR議員に、その基盤を拡大し政権政党上にVNRの国家論を波及させる可能性を与えることである。」

その際、彼らが予想していた選挙後のVNR議員数は現実の倍にあたる10~12人であった。ちなみに、「ナチ党議席が40になった時」との言い廻しもそこには見られる。

また、民主党との結合による騎士団/VNR運動の針路動揺への懸念を、同廻状は次のように述べて一掃しようとしていた。¹⁷⁾

「マーラウンが、党が針路をはずれないことを保証する。彼は議会には入らず、したがって彼の指導の下、院外の国民運動はその意志を議会代表を通して表明することが可能となる。ゆえに、国家党は新しい基準の政党となるのである。国家党は人々を代表するはずであって、議会人の道具ではない。」

ここからまた、騎士団の合併観を読みとることができるように思われる。すなわち、①合併はあくまで、政党と政治闘争団体を結合させた統合的政治運動を生成・拡充するものでなければならない——それゆえ、国家党は、「院外の国民運動」指導者を党外にもつ「新しい基準の政党となる」。②その際、主導的立場をとるのは政治闘争団体であって政党ではない——それゆえ、国家党は「議会人の道具」ではなく、「院外の国民運動」の意志を議会で表明する機関として位置づけられるのである。より具体的に言えば、先ず民主党とVNRが合併して国家党を形成し、その上でその国家党に騎士団が結びつき、更にその結合のあり方としては、騎士団の付属政党的立場に国家党を置く、このように騎士団側はこの合併を構想していたのではなからうか。そのためには、騎士団団長マーラウンは一国会議員、一政党人に埋もれてはならず、

かと言って、彼が国家党党首にもなるのは彼我の力関係からして現実には不可能であり、したがって、少なくとも彼は、院外指導者として国家党党首と同格に位置づけられる必要があったと思われるのである。

但し、このような構想とくに上記②を民主党側が共有するはずがなく、実際、選挙敗北後には、次のような真っ向から対立する見解が民主党幹部会で見られることになる。¹⁸⁾

「騎士団がこれまでの形態で残存するならば、デモクラシーはファッション的変形によって全く圧倒されてしまうだろう。院外指導者はファッション的装置のひとつであり、そのようなものは存在しえない。民主党は保持されなければならない。」

先に指摘したことと同様、このあたりがこの合併の組織上、指導上の難点をよく物語っているが、この点は後に再論することとし、ここではいま少し、マーラウンの合併観ないし政治運動観を小冊子『ドイツ国家党』から紹介しておこう。彼は、騎士団と民主党ひいては政治闘争団体と政党との結合をどのように捉え意味づけていたのか。

マーラウンに言わせれば、¹⁹⁾「あらゆる政党・政治集団は、それが運動 Bewegung の性格を喪失する時、老化し始める」。にもかかわらず「ブルジョワ諸政党は、ますます単に選挙の遂行を目的とするだけの組織に成り下がってしまっている」のであった。では新党はどうか。

「ドイツ国家党は運動としての性格を確保するため、多様で規律ある政治生活に貫かれた活力ある党を創造するつもりである。そのためにこそ国家党は、院外指導部構想をうちたてたのである。院外指導部の任務は、党組織を真の国民運動に造形することであり、党支部あるいは支持者全体を政治的意志の担い手足らしめることである。すべての者による活力ある共同生活、責任感あふれる共働が……今や必須のものである行動主義を生むに違いない。」

要するに、今こそ政党政治運動は文字通りの運動であらねばならず、でなければ、そこでは、支持者すべてを政治的意志の担い手となすことも行動主義を前面化することも期待できない、この点国家党は、騎士団団長マーラウンが指揮する院外指導部を有することによって、この問題をクリアしている、というのである。

別の箇所でも彼は、単なる政党信奉では日常的政治闘争下に支持者を団結させることは出来ない、と主張し、次のような注目すべき比較考察を行っている。ここには、政党・政治闘争団体両ファクターを併せもつ統合政治運動体の必要性を、マーラウン自身が認識していた様が明瞭に示されている。彼は言う。²⁰⁾

「自らに密接に結合した人的共同体を支えとすることが出来た政党のみが、この動乱の十年をもちこたえたことは明らかであろう。共産党は、その理念的所産ならびに良好に組織された赤色前線兵士同盟によって支えられているのであって、後者は、同党の活力ある行動主義的精鋭細胞を意味しているのである。」

社会民主党に関しては国旗団ではなく労働組合が、中央党に関しては教会・信仰団体生活がそれとして挙げられているので、上でいう「自らに密接に結合した人的共同体」を直ちに政治闘争団体とみなすことはできない。しかし、国家人民党については農民組織とならんで「ナショナルな諸ブント」がそれとして挙げられており、「人的共同体」の主たる構成部分を政治闘争団体とみなすことは十分可能であろう。国旗団の場合にしても、社会民主党以外に中央党・民主党の二党が後援していたという事情が加味される必要がある。さて、マーラウンの比較考察はナチ党や民主党にも及び、次のように述べられる。

「ナチ党は、その上昇を、ブント的に組織された SA に負っている。以上の諸政党の発展への概観から至極明瞭になるのは、政党的なものの枠をこえて結合している活力ある組織こそが決定的意義を有しているという点である。このことは、上掲の諸政党以外の政党の

命運を観察すれば、更に立証されうる。民主党には、いかなる民衆組織も用立てられていない。人民党も同様である。両党は確かにこの欠陥を除こうと試みたが、しかしそれは一種の知的クラブ形成の域をこえるものではなかった。」

したがって、民主党や人民党が位置する、「社会民主主義や右翼過激派とは一線を画した」「国家維持的でナショナルな中道勢力」は、「活力ある国民的組織」を何ら手中にしていなかったのである。そこで騎士団の登場、ということになる。マーラウンは言う。²²⁾

「ラディカリズムの進展を見る中、中道を活性化することこそドイツ民族の生存を左右する課題になる。それゆえ、かねてより、活力と行動主義的性格をもついかなる集団が中道の再編に際し投入可能か、との問いが重要な意味を有してきた。青年ドイツ騎士団の政治的展開は、1925年以降、この課題の達成を同団に準備させてきたのである。」「青年ドイツ運動は、この新しいフロントの行動主義的動力源なのである。」

繰り返しになるが、以上、マーラウンは、ワイマルの政治運動の現状から政党と政治闘争団体の結合の必要性を認識し、とりわけ共産主義運動における赤色前線兵士同盟、ナチズム運動における SA の存在価値を特筆して、同じように結合の度が高く、しかも政治闘争団体を軸とする政治運動の樹立を中道勢力の中に構想していたのであった。但し、小規模レベルではそのような運動はすでに騎士団/VNR で達成していたが、それを中道勢力の中に広く位置づけるには民主党の力を不可欠とするのであった。果して、民主党の側もマーラウンと同様の政治運動認識を有するのであろうか。あるいは民主党と合併した場合、そこでも対 VNR の如き緊密度を保持しうるのであろうか。以下、民主党側の合併論議の検討に移りたい。

(3) 民主党の姿勢

では、民主党の対騎士団観はいかなるものであったのだろうか。民主党にとって、合併相手足りうるという場合の騎士団の魅力とは何か。以下では党委員会・幹部会での議論のいくつかをとりあげるが、先取りして結論を述べれば、“政治闘争団体であるにもかかわらず”ではなく“政治闘争団体であるからこそ”、民主党は騎士団と合併したのであった。この回答は、実はすでに先行研究の成果の中に見出せるのであって、関口論文は次のように指摘している。すなわち、コッホ・ヴェーザーは、騎士団の「指導者原理と共同体意識そして行動力こそ、従来の諸政党に欠けていたものを補完し得るものとみなしたのである」と。あるいは、合併推進派の G. ボイマー Baumer は、騎士団の意義は「その強い理念的結合と軍事的組織を備えた構造にあるとみており、個人の利益より全体の利益を、経済より国家を優先させてゆくという思想を広めてゆく点にあると考えていた」と。²³⁾ ここに指摘されている騎士団の姿はまさに政治闘争団体としてのそれである。同様に、7月25、30日、9月27日における民主党指導層の合併議論の核心も、詰まるところ、政治闘争団体としての騎士団の性格評価をめぐるものであった。今や政治闘争団体ファクターは、民主党においても、あるいは自由民主主義政党たる民主党においてすら、自らの欠を補って余りある必須のものとして認知・前面化されていくのである。以下、関口論文の指摘を補完する意味も込めて、議論のいくつかを紹介してみよう。

7月25日の幹部会において、コッホ・ヴェーザーは、「騎士団と合併する場合、民主党内に矛盾は生じないのではないか。おそらく人民党の左派も合流しよう。しかし、人民党右派との連合は命取りになろう」と楽観的に自らの方向性を明確にしたが、²⁴⁾ これに賛成するボイマーは次のように言う。²⁵⁾

「VNR は、従来中道勢力に欠けていたエレメントを意味しうる。選挙棄権者は既成の政党形態では獲得しえないゆえ、選挙闘争においても別の宣伝方法が適用されなければならない。心得るべきは、今や国家とライヒをめぐる新たな対決が始まっているが、それは新

しきスタートであり青年も動員されるのだ、という感情を目覚めさせることである。たなざらしになった手法によらない徹底した活動が望まれる。」

7月30日の党委員会は、コッホ・ヴェーザー等の独断専行、すなわち国家党結成アピールを発し選挙のための行動委員会を組織したこと、への事後承認を求めるために開かれたものである。最終的にはこれは、5人が反対するのみで認められている。司会役を勤めたボイマーは、ここでも、「我々が、新たな勢力とともに新しきものを創る能力がない、などと述べんとするならば、それは精神的破産宣言であろう」と合併賛成の論陣を張っている。²⁶⁾ それに同調して、T.ホイス Heuss やW.ハイレ Heile も次のように言う。²⁷⁾

「多分、我が党が必要とする再生は、実際、騎士団によってもたらされよう。」「新しいメンバーが騎士団でなしていた如き情熱をもって新党に奉仕せんことを我々は望みたい。彼らは……強烈な理想主義と激しい活力をもたらそう。」

このように、ボイマー等は、既成政党では得られぬ要素をVNR ひいては騎士団の中に見ていたからこそ、合併を推進しようとしていたのである。

敗北に終わった国会選挙後に開かれた9月27日の幹部会においては、マーラウンや騎士団のあり方を問う批判的見解も出されたが、以下に示す一連の発言は、やはり政治闘争団体としての騎士団の魅力を語っているものと理解していいと思われる。²⁸⁾

「マーラウンはプリミティヴであるがゆえに成功をおさめているのであり、残念ながら我々にはこのプリミティヴさが欠けているのである。」「騎士団の言語は我々のものとは異なるが、その思想は我々と変わらない。より若い世代の一団を我々の意味での政治生活に引き込む第一等の可能性がそこにはある、という点を見落としてはならない。」「認められるべきは、騎士団が選挙集会において、ナチスの反セム主義的攻撃を非常にうまく防いだことである。我々が今や騎士団を通して多くの若者を保持することは喜ばしい。」

ところで、7月30日の党委員会においては、G.シュトルパー Stolper の次のような発言もみられる。これはこれで出席者の少なからぬ部分の心情を率直に伝えているように思われる。彼は言う。²⁹⁾

「この場でVNRへの不信が表明されるのは全く当然である。というのも、結婚相手の花嫁にたいしてあまりよく知らないからである。しかし、この結婚は必要である。我々が直面している困難に際し、ためらいは無効である。」

では、「不信」「ためらい」は他の出席者によってどのように表現されていたのであろうか。平和主義者L.クヴィデ Quidde の「新しい同盟者のために民主主義という言葉が不用にされることなど耐えられぬ」との発言、バイエルン青年民主党議長のO.シュトゥント Stündt の「国家党はひどい恥さらしとなろう。」「あなた方は我々青年民主主義者をよるべき者とし、我々の同行を不可能にしている。」との発言のように不快感をあらわにする者もあったが、³⁰⁾ ここで注目したいのは国旗団に関する議論である。クヴィデは合併反対論の論拠のひとつとして、「国旗団との関係はどうなるのか」と問いかけたが、社会共和主義サークルのH.ムーレ Muhle も、「国家党にとって望ましいのは、積極的共働という意味での国旗団へのポジティブな姿勢である。」とした。同じ社会共和主義者のN.ケルバー Körber もムーレに同調して、

「我々にとって、マーラウン一人が指導者であるのは耐えられない。もう一人、民主党側からの、若い世代からの指導者がならぶべきである。我々はそのような指導者を有している。」

とし、国旗団の幹部会議議長代理のE.レマー Lemmer の名を挙げている。このように、合併に全面賛成しえない者によって盛んに対国旗団関係が論じられていた。³¹⁾ これは何を意味するのであろうか。

周知の如く、民主党はワイマル連合の一角を占める者として社会民主党・中央党と共に、共和国を過激派の暴力的企図から防衛するための組織としての国旗団の設立に尽力し、24年以降その指導部および隊列に党員を送っていたのであった。にもかかわらず、騎士団との合併が推進されたのであった。そこで、騎士団の魅力を主張する者に対し、クヴィデは、それは国旗団で足ると主張し、結局は合併に賛成したムーレやケルバーは、騎士団との合併へのためらいを国旗団という対重で解消しようとしていたのである。いずれにせよ、騎士団の政治闘争団体ならではの魅力が合併推進派に持ち出されていたからこそ、合併批判派は、同じカテゴリーに属する国旗団を対置していたのであり、その意味では、それが騎士団であれ国旗団であれ、政治闘争団体の魅力如何が合併論議の中核に位置づいていたと言えるのではなからうか。民主党においても、マーラウンの言う「自らに密接に結合した人的共同体を支えとすることが出来た政党」への変貌の必要性は、広く共有されていたわけである。

とすれば残された問題は、この「人的共同体」そのものは騎士団から提供されるにしても、その騎士団を民主党がどのように位置づければ「自らに密接に結合した」ものになるのか、ということになる。合併劇が選挙後一ヶ月足らずで終幕を迎えたことは、この結合のあり様如何の問題が結局解決されなかったことを示している。以下、この点を視野に入れながら、いまま少し国旗団論議の検討を続けてみよう。

(4) 政党軍か付属政党か

上述の党委員会での国旗団議論そのものは、マーラウンへの対抗者として名を挙げられたレマーが、「国旗団について我々はVNRと即座の一致をみている。近日中にすべての国旗団同志を満足させる声明が出されよう。」と発言して終息をみた。³³⁾しかし、この国旗団をめぐるやり取りの中に、すでに、合併の完遂を困難にする組織上、指導上の難点の一端が示されていることもまた事実である。民主党は一体、二つの政治闘争団体との関係にどう整合性をもたせるつもりであったのだろうか。加えてそもそも、クヴィデやムーレが言うように国旗団そのものを騎士団の代替物・対抗物とみなすことは、現実の問題としては不可能であった。O.マイヤー Meyer が11月8日の民主党幹部会で、「国旗団にはそれを社会主義的組織にしようとする傾向があり、それゆえ今、公けに国旗団を推奨することは得策ではない。」と述べているように、³³⁾ 当時、国旗団は、社会民主党の政党軍的存在になりつつあるのが実情であった。したがって、あくまでも国家党内に騎士団への対重を求めようとするならば、その場合は国旗団から民主党の隊列を分離独立させることが必要となろう。ケルバーの言は、そのような前提に立ってのものと解することも可能かも知れない。9月27日の幹部会においても、プロイセン邦議会民主党議員団長であったB.ファルク Falk が、「国家党内に、騎士団に対する何らかの対抗物が与えられなければならない。」と主張している。³⁴⁾

しかし、その場合でもなお、その分離されたレマー率いる隊列と騎士団との関係がどうなるのか、あるいはレマーとマーラウンの上下関係はどうなるのか、との問題は残存しよう。選挙闘争時、

「全ドイツ国民に呼びかけられるべき建設的行動主義を展開するに、若き国家党は適任である。建設的行動主義にこそ、国家破壊的なラディカリズムと反国民的な独裁志向への対抗力提供の唯一の可能性がある。」

と主張する青年世代むけのピラが出されたが、その末尾には、「我々は二つのブントすなわち騎士団と国旗団に背信することなく、これをなす。」として、マーラウンとレマーの署名があった。³⁵⁾このピラのようなレマーとの同格的地位にマーラウンが甘んじるのであれば、民主党にとって問題はない。しかし、そうでないことは上述した通りである。マーラウンは騎士団兼

VNRの最高指導者であり、その彼と同等に位置づくのは民主党党首以外にありえず、いかに民主党・国旗団の最高幹部の一人とはいえレマーではなかろう。しかも、マーラウンにとっては、自らが指揮する院外指導部こそ、国家党を新しい基準の政党足らしめ Bewegung 足らしめるものであった。したがって、院外指導者（——別の表現では組織指導者、全国指導者）たる彼に実質的最高権力を委ねてこそ、この合併は意味あるものとなる、というのが騎士団側の基本姿勢であろう。翻って、それゆえにこそ、それに対抗して民主党側はレマーないし国旗団をもち出して、院外指導者マーラウンの相対的地位低下を図ったのであった。

この指導体制の問題が意味するところは、換言すれば、この統合運動体の性格を規定するのは政党・政治闘争団体いづれのファクターか、ということである。すなわち、騎士団を国家党に付属する政党軍的存在にするのか、それとも逆に、国家党を騎士団の付属政党にするのか。そこが決まれば自ずと最高指導者も決まることになる。

言うまでもなく、民主党側の発想は前者であろう。当然そこでの議論は、党に付属する組織である以上、騎士団は自立性を放棄して解散すべきである、マーラウンはその付属組織の長として遇されればよい、政党軍からの逸脱を招きかねない院外指導部など不必要、ということになる。9月27日の民主党幹部会での発言のいくつかは、このような姿勢をかなり明確にしている。たとえば、上述のファルクは、「マーラウンが党の組織を手中にすることがあってはならない」がゆえに、また、「今なお存続している騎士団は、我々の理念貫徹を妨げることになる力の源泉である」と考えるがゆえに、「国家党内に、騎士団にたいする対する何らかの対抗物が与えられなければならない。」と主張していたのであった。³⁶⁾あるいは、これも再録になるが、ベルリン商科大学教授G.ベルンハルト Bernhard の、

「騎士団がこれまでの形態で残存するならば、デモクラシーはファッション的変形によって全く圧倒されてしまうだろう。院外指導者はファッション的装置のひとつであり、そのようなものは存在しえない。」

との発言もあった。³⁷⁾そしてこれに呼応して、ハムブルクの教師H.ランダール Landahl は「騎士団は政治的幼児であり、しかも「マーラウンはヒトラー的なものと同一線上で競合している。」として、次のように主張していた。³⁸⁾

「今民主党を解散することは騎士団への引き渡しと同義である。解散してはならない。マーラウンが組織を振興することなどありえず、彼を全国指導者・組織指導者として認めることは出来ない。」

他方、自らの解散など騎士団側には全く意識されてはおらず、彼らにとっては国家党建設の試みは、騎士団主導のVN-Aktionの延長線上の、いわばVNR拡大版でしかなかった。これをマーラウンは、次のように簡潔に述べている。³⁹⁾「自らの組織、政治的骨組みをいささかも変えることなく、青年ドイツ騎士団は、その力をVNRに、そして今や国家党に投入するものである」と。付言すれば、付属政党VNRの拡大版として国家党を捉えていたからこそ、先に紹介したような、一部の「VNRにとって好ましくない者たちの貯水池として民主党が存続することが望ましい」とのマーラウンの発言もありえたし、また、騎士団が主導する結集運動の一環としての国家党結成であったがゆえに、マーラウンは、党の外に立って運動全体を見渡せる「院外指導者」としての地位を選択したのもであった。彼の「国家党は新しい基準の政党となる」との言い廻しには、このような意味が濃厚に込められていたのである。

結局、この合併は、一方による他の吸収合併ではなかったから、政党軍か付属政党かの問題は容易にその解決をみず、指導体制も双方の妥協にもとづく曖昧なものに終始した。

上掲民主党幹部会においても、議論に先立ってマイヤーは、民主党側が政治指導者と国会議員団長のポストをとる替わりに組織（＝院外）指導者としてのマーラウンを認め、また、騎士

団の非解散については、「我々は妥協しなければならない。」としていた。⁴⁰⁾ また、議論後の決議においても、対騎士団関係と党トップの二重性問題を、対国旗団関係や反セム主義問題などと共に、今後「明確にすべき課題」として先送りしていたのであった。⁴¹⁾ これに対し、すでに上述のランダール等は、「国家党は、実質的に政党連合 Kartellpartei の外観をとるべき」との、統合運動体としての性格を反故にするような、単なる提携論的見解を提起していたが、⁴²⁾ そもそも、「明確にすべき課題」として意欲的に取り組むだけの価値を感じさせるに足る選挙結果が、この合併から得られていないこともまた事実であった。加えて、選挙候補者のリスト・アップ時に表面化された相互不信・あつれきもその蓄積をみていた。上掲「課題」のひとつに反セム主義問題が挙げられているのは、リスト・アップ時に、騎士団が民主党の推す「ユダヤ人」候補者に強い難色を示したことに起因していた。騎士団はナチズム運動の「煽動的反セム主義」には反対したが、反セム主義自体から解放されてはいなかったのである。また、騎士団はその思想に忠実に、民主党の推す人物を、「彼は IG フェルペンの役員であり多様に金権主義的権力欲を示してきたはず」として拒絶する一方、同じ政治闘争団体たる国旗団の指導者レマーの友人であるという一点で了承する、という態度をとったのであった。ちなみに、上述のマイヤーは、「半ユダヤ人」だが「かつてプロイセンの近衛将校であった」として、候補者として認定されていた。⁴³⁾

さて、「我々は妥協しなければならない」とはそのマイヤーの言であったが、騎士団側にはもはやその用意はなかった。20人の議員を擁するにすぎない国家党は「ドイツ政治のキー・ポジション」を占めるには至らず、更にその国家党内の少数派にすぎない6人のVNR系議員が、民主党系議員とのあつれきを抱える中でその「国家論を波及させる可能性」は殆ど無いに等しかった。異質な政治運動体の対等合併にともなう困難は双方等しく負わねばならなかったが、曲がりなりにも付属政党VNRを軸とする統合運動体生成に成功した経験をもつ騎士団にとっては、二回目の企図は統合の度においても統合のあり方においても、まったく許容できるものではなかったのである。 (未完)

註

- 1) A. Mahraun, Die Deutsche Staatspartei, Berlin 1930, S. 38
- 2) Quellen zur Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien, Dritte Reihe, Bd. 4/1, Politik und Wirtschaft in der Krise 1930-1932, Düsseldorf 1980, Dok. Nr. 131, 16. 8. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 367
- 3) Quellen zur Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien, Dritte Reihe, Bd. 5, Linkliberalismus in der Weimarer Republik, Düsseldorf 1980, Dok. Nr. 167, 30. 7. 1930: Sitzung des Parteiausschusses, S. 567
- 4) 16. 8. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 367
- 5) 30. 7. 1930: Sitzung des Parteiausschusses, S. 572
- 6) 註3) 資料内 Dok. Nr. 170, 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 591
- 7) 註2) 資料内 Dok. Nr. 145, 3. 10. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 405
- 8) 註3) 資料内 Dok. Nr. 166, 25. 7. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 559
- 9) 3. 10. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 404
- 10) Mahraun, S. 42ff.
- 11) 例えば阪野智一「ドイツ民主党とヴァイマル・デモクラシー」『六甲台論叢』28-4(1982) 166頁以下。またB. B. フライ『ヴァイマル共和国における自由民主主義者の群像』太陽出版 1987(1985)

自立的政治闘争団体と政党政治（Ⅲ）

272 頁以下、本書は合併劇の顛末についても詳しい（参照、第 8 章）。

- 12) G. Buchstab(Hrsg.), Keine Stimme dem Radikalismus, Berlin 1984, Dok. 14, Dstp: Deutsche Staatsbürger!, S. 51
- 13) Protokoll von der Reichsvorstandssitzung der VNR am 26. Heuerts 1930 (HA 43/875)
- 14) 16. 8. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 368
- 15) Ebd., S. 369
- 16) Ebd., S. 368
- 17) Ebd., S. 369
- 18) 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 587
- 19) Mahraun, S. 10
- 20) Ebd., S. 15f.
- 21) Ebd., S. 16
- 22) Ebd., S. 17
- 23) 関口宏道「コッホ・ヴェーザーと政党改革運動(1928-1930年)」『西洋史学』91 (1973) 30頁
- 24) 25. 7. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 559
- 25) Ebd., S. 561
- 26) 30. 7. 1930: Sitzung des Parteiausschusses, S. 570
- 27) Ebd., S. 568, 573
- 28) 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 589, 594
- 29) 30. 7. 1930: Sitzung des Parteiausschusses, S. 572
- 30) Ebd., S. 571, 573
- 31) Ebd., S. 569, 571f.
- 32) Ebd., S. 575
- 33) 註3)資料内 Dok. Nr. 172, 8. 11. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 613 なお、この11月8日、民主党は正式に解散し国家党へ移行する
- 34) 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 586
- 35) Buchstab(Hrsg.), Dok. 16, Dstp: An die junge Generation!, S. 55
- 36) 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 586
- 37) Ebd., S. 587
- 38) Ebd., S. 587f.
- 39) Mahraun, S. 20
- 40) 27. 9. 1930: Sitzung des Vorstandes, S. 584f.
- 41) Ebd., S. 595
- 42) Ebd., S. 588
- 43) 16. 8. 1930: Rundschreiben des Jungdeutschen Ordens, S. 370ff.